

## 一般演題 スポーツ外傷 OP3-4 脳振盪に対する高気圧酸素治療の安全性について

○笹原 潤<sup>1,2)</sup> 梅木秀一<sup>1,2)</sup> 山口信彦<sup>1,3)</sup>  
平畑佑輔<sup>1,2)</sup> 安井洋一<sup>1,2)</sup> 宮本 亘<sup>1,2)</sup>  
森山菜緒<sup>4)</sup> 宇野希世子<sup>5)</sup> 中川 匠<sup>2)</sup>

- 1) 帝京大学スポーツ医科学クリニック
- 2) 帝京大学スポーツ医科学センター
- 3) 医療法人徳洲会 山内病院
- 4) 帝京大学医学部附属病院 臨床試験・治験統括センター
- 5) 帝京大学臨床研究センター

脳振盪は、頭部に打撲等の強い外力が加わった結果起こる一時的な脳の障害で、一過性の意識障害、記憶障害をきたす。現在行われている脳振盪の治療は安静のみで、積極的な治療手段は選択肢となっていない。近年、スポーツ外傷に対する高気圧酸素治療（HBOT）が臨床応用されつつある。重症頭部外傷後や脳浮腫に対するHBOTは保険適応があり、その有効性も多数報告されている一方で、脳振盪の急性期に対する安全性や有効性はわかっていない。本研究の目的は、スポーツ由来の脳振盪急性期に対するHBOTの安全性を明らかにすることである。

2022年4月から2023年3月までの間に当施設を受診し、脳振盪と診断されたスポーツ選手を対象とした。適格基準は、18歳以上であること、受傷から3日以内にHBOTを開始できること、CTないしMRIで頭蓋内出血が否定されていることとした。HBOTは3日間を1クールとして実施し、症状が遺残している場合は1日開けて2クール目として3日間のHBOTを追加した。調査項目は、有害事象と全体練習復帰に要した期間である。競技復帰へのプロトコルは所属する競技団体が定める方針に則り、ない場合はGRTPを用いた。対象となった症例は20例（男性15例、女性5例、平均20歳）で、HBOTによる有害事象はなかった。HBOTを2クール行った症例は5例で、症状が回復したため1クール目の途中で中止した症例が1例あった。全例が競技復帰できており、全体練習復帰に要した期間は平均21日（8日-67日）であった。1年後のフォローアップにおいて、脳振盪を再受傷した症例や症状が遺残している症例はなかった。

スポーツ由来の脳振盪急性期に対し、HBOTは安全に行うことができた。